

ホセイノフ・ラファエル、
マヒサティ・ギャンジ

アゼルバイジャンの思い出

画家G. ムスタファイエヴァ
『メフセティの肖像画』



女流詩人のMahsati Ganjavi (マヒサティ・ギャンジャヴィ)は900年前、ギャンジャという昔のアゼルバイジャンの街に生まれた。Mahsatiは、アゼルバイジャンだけではなく世界でも認められた優れた詩人の一人である。

Mahsati Ganjaviは、詩の中で、自由な意志と純粋な愛という人文主義者の理想を讃えた。思考、題材の幅広さ、そして人間の本質を描いてきた点で、中世における西洋、東洋、全ての女性詩人と異なる。彼女は世界文学史上、最も優れた人物の一人であると考えられる。

Mahsatiが作品を残した活躍した12世紀は、アゼルバイジャン文化・文学の黄金期である。12世紀において、のちの時代においても評価される多くの天才が文学界で腕を競い合った。Nizamiや Khagani、Falaki Shirvani、Mujiraddin Beylaganiの他、偉大な文人が数多く名を残し、また、偉大な文人の影で評価されないものもいた。この時代は他の国や他の時代においても、名を残すような優れた詩人が次々と生まれたということがわかる。才能ある詩人らの競い合いは、12世紀のアゼルバイジャン文学の極めて重要な側面である。Mahsati作品見た目には小さく見えても、意味的には深いすぎて限定していない。Mahsatiは詩の分野において自由思想の先駆者のうちの一人である。

Mahsatiの詩の多くは、ギャンジャの雰囲気をまとっている。Mahsatiは自身の四行詩の1つで記述している。

دهش نابوخ همه رب ما یتسه هم نم
قاط

قارغ و ناسارخ رد نسحب روهشم
ادخ رهب زا هچنگ بیطخ روپ یا

قارغ درد زا م زوسب نی نچ راذگم

私はMahsati。誰も私の美しさを共有できない。KhorasanとIraqは私に驚いた。あなたよ、Pur-i Khatib-i Ganjaよ、お願いだから。別れさせないで。私を炎のように燃やさないで。

12世紀のアゼルバイジャンの詩人であるNizamiの“Khamse”という作品(Nizami著)に、Mahsatiの為人が描かれている。確かに、Mahsatiは比喩的なイメージではなく、Nizamiのmasnaviにおいて、歴史的な人格者として描かれている。masnaviに先立ち、“Khosrov and Shirin”という作品(Nizami 著、1181年)に次のように書かれている。

اهل لغ رب اری تسهم و یتس
اه لثم زا یشخب چنگ دص ی بش

Sati と Mahsatiのgazalへ、
あなた達は毎晩百の宝を
与えたと、
彼が言っている。

Nizamiの記述か



ら、Mahsatiが宮殿の常連客であったことは明らかである。大いに気前の良い扱いを受けていたことだろう。Mahsatiと一緒に居たSatiに言及されている事も、重要なことである。女流詩人Satiの娘も文人だった。詩の形式が伝承されている。

“Mahsati”を「月のレディ」と翻訳されていたという、確かな情報源もある。「偉大なレディ」や「月のレディ」という意味が、正しい認識であると考えられよう。

民間によれば、Mahsati

の墓は、Nizamiの墓の近くにあった。一般的に、MahsatiとNizamiが埋葬された墓地は、その後、学者、詩人を含む著名な人物が埋葬された聖域となった。

Mahsatiのチェスに対する態度は、一つの興味深い論点を提起する。彼女の四行詩には、彼女はこのゲームに精通していたことが記されている。韻を踏むためではなく、敢えてチェスそのものを話題にするために、四行詩の中でチェス用語を用いることもあった。古典

家D. イスケンデロヴ『メフセティ・ギャンジェヴィ』



の中では珍しい手法である。大英図書館にある「MahsatiとEmir Ahmad」のために描かれた細密画において、Ibn Khatibが女流詩人とチェスボードを介して描かれているのは、単なる思いつきではない。

Mahsatiの詩は、テーマやイデオロギーの方向性によって、いくつかのグループに分類できる。時期によってMahsatiの世界観も違うし、表現方法も違う。詩の一部は伝統的な愛の詩に基づいている。

Mahsatiはあらかじめ彼女に最後の日を考えて時、悲しくはなかった。

نت شىوخ يان شأرىد لد زام ناغ رد
 ياه هل ان اب ين وچمه مت فرگ وخ
 نت شىوخ
 ملد اب اهىت سود دراد هك ىردو مغ زج
 نت شىوخ ىارس رد مدى دن ىزوسلد راى
 را دى رخ ناج زك ىا هن اويد ،ما هك نم
 تسامغ
 نت شىوخ ىارب دن اد ىم گرم ارىت ح ار
 فك زا هك مت سه ىا هدرم ژب ؤچنغ
 ما هداد
 ى افص ورطع ىگدنز راهب رد
 نت شىوخ
 وچمه ار ىت سه م دوبن زوسلد ىم دم
 عمش
 ىازع رد دزىر كشا دى اب دوخ
 نت شىوخ

かつての恋人と悲嘆で

慟哭している。フルートのような慟哭の中で生きている。

私魂に忠実な唯一の友達は悲しみだけ、

しかし、この宮殿で私は莊嚴な魂と親交を深め。

私はだれかと問い、悲嘆と悲しみを愛する者、

きちがい女、悲しみなくして静寂が死

とだれがわかろう！

私は喜びと人生のかぐわしさを失った不幸な人間。

私はまるで開くことなくしぼんだつぼみ。

灯火のようなMahsatiは忠実な友人を

見つけることは出来なかった。

ただ涙と悲しみだけが彼女の心の友達だった。

Mahsatiは、人類があらゆる生物の頂点にいとを考え、それゆえに彼らの素晴らしさを詩に編み込んだが、同時に、精神的脆さを持つ人間の道徳的な欠点を皮肉をもって、描き込むことも忘れはしなかった。

Mahsatiの話をする際、長らく詩を崇拜している人たち、回顧録の作家は、

「美しい」という言葉を使わないと気が済まないようだ。あり得ない話

だが、しわくちな顔のMahsatiを見せられたとして、我々はそれを信じる事ができるだろうか？ここまでMahsatiの四行詩を見てきて、柔らかく繊細な感情が描かれており、1行1行に心を打たれ親しみを感じるものであった。となると、Mahsatiに「美しい」という言葉をかけるのが妥当ではないだろうか？知的で鮮やかにきらめく詩の世界を、他に表現する言葉があるだろうか？

美しきMahsatiは過去の人物だが、我々を残して消えた訳ではない。現代にも再び戻って来ている。

ندوب ده اوخ می قم لد و مت فر ن م
ندوب ده اوخ می دن ارت ی ا ه م غ
وت قشع رد تسرا رفا سم هچ رگ نت
لد
ندوب ده اوخ می دق ه د ع اق رب

私は遠くへ行ってしまいが、心はここにある。ここで私の悲しみを共有するであろう。体は去っても、心は去らない。今までと変わらず、あなたの愛に喜びを感じるであろう。アゼルバイジャンの天才的な詩人かつ哲学者でもあったMahsati Ganjavi



は、現代の我々と共にあり続けるだろう。彼女の詩も、いつまでも若々しく、色褪せることも無いだろう。アゼルバイジャンの同胞と共に、そして世代や場所を問わず世界中の読者と共に、Mahsatiは最も親しい話し相手として、苦しみを分かち合う者として、あり続けるのだ。その詩は永遠にきらめき、永久に美しいま

まだ。本文は歴史によって与えられた贈り物であり、言語と人類にもたらしたMahsatiの偉業を、称えるものである。✿